六の宮の姫君

芥川龍之介

一

六の宮の姫君の父は、古い宮腹の生れだつた。が、時勢にも遅れ勝ちな、昔気質の人だつたから、官も兵部大輔より昇らなかつた。姫君はさう云ふ父母と一しよに、六の宮のほとりにある、木高い屋形に住まつてゐた。六の宮の姫君と云ふのは、その土地の名前に拠つたのだつた。

父母は姫君を寵愛した。しかしやはり昔風に、進んでは誰にもめあはせなかつた。誰か云ひ寄る人があればと、心待ちに待つばかりだつた。姫君も父母の教

へ通り、つつましい朝夕を送つてゐた。それは悲しみも知らないと同時に、喜びも知らない生涯だつた。が、世間見ずの姫君は、格別不満も感じなかつた。「父母さへ達者でゐてくれれば好い。」――姫君はさう思つてゐた。

　古い池に枝垂(しだ)れた桜は、年毎に乏しい花を開いた。その内に姫君も何時(いつ)の間にか、大人寂(おとなさ)びた美しさを具へ出した。が、頼みに思つた父は、年頃酒を過ごした為に、突然故人になつてしまつた。のみならず母も半年ほどの内に、返らない歎きを重ねた揚句、とうとう父の跡を追つて行つた。姫君は悲しいと云ふよりも、

途方に暮れずにはゐられなかつた。実際ふところ子の姫君にはたつた一人の乳母(うば)の外に、たよるものは何もないのだつた。

　乳母はけなげにも姫君の為に、骨身を惜まず働き続けた。が、家に持ち伝へた螺鈿(らでん)の手筥(てばこ)や白がねの香炉は、何時か一つづつ失はれて行つた。と同時に召使ひの男女も、誰からか暇をとり始めた。姫君にも暮らしの辛(つら)い事は、だんだんはつきりわかるやうになつた。しかしそれをどうする事も、姫君の力には及ばなかつた。姫君は寂しい屋形の対(たい)に、やはり昔と少しも変らず、琴を引いたり歌を詠(よ)んだり、単調な遊びを繰返し

てゐた。

すると或秋の夕ぐれ、乳母は姫君の前へ出ると、考へ考へこんな事を云つた。

「甥（をひ）の法師の頼みますには、丹波（たんば）の前司（ぜんじ）なにがしの殿が、あなた様に会はせて頂きたいとか申して居るさうでございます。前司はかたちも美しい上、心ばへも善いさうでございますし、前司の父も受領（ずりやう）とは申せ、近い上達部（かんだちめ）の子でもございますから、お会ひになつては如何（いかが）でございませう？　かやうに心細い暮しをなさいますよりも、少しは益（ま）しかと存じますが。……」

姫君は忍び音（ね）に泣き初めた。その男に肌身を任せる

のは、不如意な暮しを扶（たす）ける為に、体を売るのも同様だつた。勿論それも世の中には多いと云ふ事は承知してゐた。が、現在さうなつて見ると、悲しさは又格別だつた。姫君は乳母と向き合つた儘、葛（くず）の葉を吹き返す風の中に、何時までも袖を顔にしてゐた。……

二

しかし姫君は何時の間にか、夜毎に男と会ふやうになつた。男は乳母の言葉通りやさしい心の持ち主だつた。顔かたちもさすがにみやびてゐた。その上姫君の

美しさに、何も彼も忘れてゐる事は、殆誰の目にも明らかだつた。姫君も勿論この男に、悪い心は持たなかつた。時には頼もしいと思ふ事もあつた。が、蝶鳥の几帳を立てた陰に、燈台の光を眩しがりながら、男と二人むつびあふ時にも、嬉しいとは一夜も思はなかつた。

その内に屋形は少しづつ、花やかな空気を加へ初めた。黒棚や簾も新たになり、召使ひの数も殖えたのだつた。乳母は勿論以前よりも、活き活きと暮しを取り賄つた。しかし姫君はさう云ふ変化も、寂しさうに見てゐるばかりだつた。

或時雨(しぐれ)の渡つた夜、男は姫君と酒を酌(く)みながら、丹波の国にあつたと云ふ、気味の悪い話をした。出雲路(いづもぢ)へ下る旅人が大江山の麓に宿を借りた。宿の妻は丁度その夜、無事に女の子を産み落した。すると旅人は生家(うぶや)の中から、何とも知れぬ大男が、急ぎ足に外へ出て来るのを見た。大男は唯「年は八歳、命(めい)は自害」と云ひ捨てたなり、忽(たちま)ち何処(どこ)かへ消えてしまつた。旅人はそれから九年目に、今度は京へ上る途中、同じ家に宿つて見た。所が実際女の子は、八つの年に変死してゐた。しかも木から落ちた拍子に、鎌を喉(のど)へ突き立ててゐた。――話は大体かう云ふのだつた。姫君はそ

れを聞いた時に、宿命のせんなさに脅(おびやか)された。その女の子に比べれば、この男を頼みに暮してゐるのは、まだしも仕合せに違ひなかつた。「なりゆきに任せる外はない。」——姫君はさう思ひながら、顔だけはあでやかにほほ笑んでゐた。

屋形の軒に当つた松は、何度も雪に枝を折られた。姫君は昼は昔のやうに、琴を引いたり双六(すごろく)を打つたりした。夜は男と一つ褥(しとね)に、水鳥の池に下りる音を聞いた。それは悲しみも少いと同時に、喜びも少い朝夕だつた。が、姫君は不相変(あひかはらず)、この懶(ものう)い安らかさの中に、はかない満足を見出してゐた。

しかしその安らかさも、思ひの外(ほか)急に尽きる時が来た。やつと春の返つた或夜、男は姫君と二人になると、「そなたに会ふのも今宵(こよひ)ぎりぢや」と、云ひ悪(に)くさうに口を切つた。男の父は今度の除目(ぢもく)に、陸奥(むつ)の守(かみ)に任ぜられた。男もその為に雪の深い奥へ、一しよに下らねばならなかつた。勿論姫君と別れるのは、何よりも男には悲しかつた。が、姫君を妻にしたのは、父にも隠してゐたのだから、今更打ち明ける事は出来悪(できにく)かつた。男はため息をつきながら、長々とさう云ふ事情を話した。

「しかし五年たてば任終(にんはて)ぢや。その時を楽しみに待つ

てたもれ。」

姫君はもう泣き伏してゐた。たとひ恋しいとは思はぬまでも、頼みにした男と別れるのは、言葉には尽せない悲しさだつた。男は姫君の背を撫でては、いろいろ慰めたり励ましたりした。が、これも二言目には、涙に声を曇らせるのだつた。

其処へ何も知らない乳母は、年の若い女房たちと、銚子（てうし）や高坏（たかつき）を運んで来た。古い池に枝垂（しだ）れた桜も、蕾（つぼみ）を持つた事を話しながら。……

三

六年目の春は返つて来た。が、奥へ下つた男は、遂に都へは帰らなかつた。その間に召使ひは一人も残らず、ちりぢりに何処かへ立ち退(の)いてしまふし、姫君の住んでゐた東の対(たい)も或年の大風に倒れてしまつた。姫君はそれ以来乳母と一しよに侍(さむらひ)の廊(ほそどの)を住居(すまひ)にしてゐた。其処は住居と云ふものの、手狭でもあれば住み荒してもあり、僅に雨露(あめつゆ)の凌(しの)げるだけだつた。乳母はこの廊(ほそどの)へ移つた当座、いたはしい姫君の姿を見ると、涙を落さずにはゐられなかつた。が、又或時は理由もないのに、腹ばかり立ててゐる事があつた。

暮しのつらいのは勿論だつた。棚の厨子(づし)はとうの昔、米や青菜に変つてゐた。今では姫君の袿(うちぎ)や袴(はかま)も身についてゐる外は残らなかつた。乳母は焚(た)き物に事を欠けば、立ち腐れになつた寝殿(しんでん)へ、板を剥(は)ぎに出かける位だつた。しかし姫君は昔の通り、琴や歌に気を晴らしながら、ぢつと男を待ち続けてゐた。

　するとその年の秋の月夜、乳母は姫君の前へ出ると、考へ考へこんな事を云つた。

「殿はもう御帰りにはなりますまい。あなた様も殿の事は、お忘れになつては如何(いかが)でございませう。就てはこの頃或典薬之助(てんやくのすけ)が、あなた様にお会はせ申せと、責

め立てて居るのでございますが、……」

姫君はその話を聞きながら、六年以前（まへ）の事を思ひ出した。六年以前には、いくら泣いても、泣き足りない程悲しかつた。が、今は体も心も余りにそれには疲れてゐた。「唯静かに老い朽ちたい。」……その外は何も考へなかつた。姫君は話を聞き終ると、白い月を眺めたなり、懶（ものうげ）げにやつれた顔を振つた。

「わたしはもう何も入（い）らぬ。生きようとも死なうとも一つ事ぢや。……」

*　　　　*　　　　*

丁度これと同じ時刻、男は遠い常陸（ひたち）の国の屋形に、

新しい妻と酒を斟（く）んでゐた。妻は父の目がねにかなつた、この国の守（かみ）の娘だつた。

「あの音は何ぢや？」

男はふと驚いたやうに、静かな月明りの軒を見上げた。その時なぜか男の胸には、はつきり姫君の姿が浮んでゐた。

「栗の実が落ちたのでございませう。」

常陸の妻はさう答へながら、ふつつかに銚子の酒をさした。

四

男が京へ帰つたのは、丁度九年目の晩秋だつた。男と常陸の妻の族（うから）と、——彼等は京へはひる途中、日がらの悪いのを避ける為に、三四日粟津（あはづ）に滞在した。それから京へはひる時も、昼の人目に立たないやうに、わざと日の暮を選ぶ事にした。男は鄙（ひな）にゐる間も、二三度京の妻のもとへ、懇（ねんご）ろな消息をことづけてやつた。が、使が帰らなかつたり、幸ひ帰つて来たと思へば、姫君の屋形がわからなかつたり、一度も返事は手に入らなかつた。それだけに京へはひつたとなると、恋しさも亦一層（ひとしほ）だつた。男は妻の父の屋形へ無事に妻を送

りこむが早いか、旅仕度も解かずに六の宮へ行つた。

六の宮へ行つて見ると、昔あつた四足(よつあし)の門も、檜皮葺(ひはだぶ)きの寝殿や対(たい)も、悉(ことごとく)今はなくなつてゐた。その中に唯残つてゐるのは、崩れ残りの築土(ついぢ)だけだつた。男は草の中に佇(たたず)んだ儘、茫然と庭の跡を眺めまはした。其処には半ば埋もれた池に、水葱(なぎ)が少し作つてあつた。水葱はかすかな新月の光に、ひつそりと葉を簇(むら)がらせてゐた。

男は政所(まんどころ)と覚(おぼ)しいあたりに、傾いた板屋のあるのを見つけた。板屋の中には近寄つて見ると、誰か人影もあるらしかつた。男は闇を透(す)かしながら、そつとそ

の人影に声をかけた。すると月明りによろぼひ出たのは、何処か見覚えのある老尼だつた。

尼は男に名のられると、何も云はずに泣き続けた。その後やつと途切れ途切れに、姫君の身の上を話し出した。

「御見忘れでもございませうが、手前は御内に仕へて居つた、はした女の母でございます。殿がお下りになつてからも、娘はまだ五年ばかり、御奉公致して居りました。が、その内に夫と共々、但馬へ下る事になりましたから、手前もその節娘と一しよに、御暇を頂いたのでございます。所がこの頃姫君の事が、何かと心

にかかりますので、手前一人京へ上つて見ますと、御覧の通り御屋形も何もなくなつて居るのでございませんか？　姫君も何処へいらつしやつた事やら、――実は手前もさき頃から、途方に暮れて居るのでございます。殿は御存知もございますまいが、娘が御奉公申して居つた間も、姫君のお暮しのおいたはしさは、申しやうもない位でございました。……」

男は一部始終を聞いた後、この腰の曲つた尼に、下の衣を一枚脱いで渡した。それから頭を垂れた儘、黙然と草の中を歩み去つた。

五

男は翌日から姫君を探しに、洛中（らくちゆう）を方々歩きまはつた。が、何処へどうしたのか、容易に行（ゆ）き方（がた）はわからなかつた。

すると何日か後の夕ぐれ、男はむら雨（さめ）を避ける為に、朱雀門（すざくもん）の前にある、西の曲殿（きよくでん）の軒下に立つた。其処にはまだ男の外にも、物乞ひらしい法師が一人、やはり雨止みを待ちわびてゐた。雨は丹塗（にぬ）りの門の空に、寂しい音を立て続けた。男は法師を尻目にしながら、苛立（いらだ）たしい思ひを紛（まぎ）らせたさに、あちこち石畳みを歩

いてゐた。その内にふと男の耳は、薄暗い窓の櫺子（れんじ）の中に、人のゐるらしいけはひを捉へた。男は殆（ほとんど）何の気なしに、ちらりと窓を覗いて見た。

窓の中には尼が一人、破れた筵（むしろ）をまとひながら、病人らしい女を介抱してゐた。女は夕ぐれの薄明りにも、無気味な程痩（や）せ枯（が）れてゐるらしかつた。しかしその姫君に違ひない事は、一目見ただけでも十分だつた。男は声をかけようとした。が、浅ましい姫君の姿を見ると、なぜかその声が出せなかつた。姫君は男のゐるのも知らず、破れ筵の上に寝反りを打つと、苦しさうにこんな歌を詠（よ）んだ。

「たまくらのすきまの風もさむかりき、身はならはしのものにざりける。」

男はこの声を聞いた時、思はず姫君の名前を呼んだ。姫君はさすがに枕を起した。が、男を見るが早いか、何かかすかに叫んだきり、又筵の上に俯伏（うつぶ）してしまつた。尼は、――あの忠実な乳母は、其処へ飛びこんだ男と一しよに、慌（あわ）てて姫君を抱き起した。しかし抱き起した顔を見ると、乳母は勿論男さへも、一層慌てずにはゐられなかつた。

乳母はまるで気の狂つたやうに、乞食法師のもとへ走り寄つた。さうして、臨終の姫君の為に、何なりと

も経を読んでくれと云つた。法師は乳母の望み通り、姫君の枕もとへ座を占めた。が、経文を読誦（どくじゅ）する代りに、姫君へかう言葉をかけた。

「往生は人手に出来るものではござらぬ。唯御自身怠らずに、阿弥陀仏の御名（みな）をお唱へなされ。」

姫君は男に抱かれた儘、細ぼそと仏名（ぶつみやう）を唱へ出した。と思ふと恐しさうに、ぢつと門の天井を見つめた。

「あれ、あそこに火の燃える車が。……」

「そのやうな物にお恐れなさるな。御仏（みほとけ）さへ念ずればよろしうござる。」

法師はやや声を励ました。すると姫君は少時（しばらく）の後、

又夢うつつのやうに呟き出した。

「金色の蓮華が見えまする。天蓋のやうに大きい蓮華が。……」

法師は何か云はうとしたが、今度はそれよりもさきに、姫君が切れ切れに口を開いた。

「蓮華はもう見えませぬ。跡には唯暗い中に風ばかり吹いて居りまする。」

「一心に仏名を御唱へなされ。なぜ一心に御唱へなさらぬ？」

法師は殆ど叱るやうに云つた。が、姫君は絶え入りさうに、同じ事を繰り返すばかりだつた。

「何も、——何も見えませぬ。暗い中に風ばかり、——
——冷たい風ばかり吹いて参りまする。」
男や乳母は涙を呑みながら、口の内に弥陀を念じ続けた。法師も勿論合掌した儘、姫君の念仏を扶けてゐた。さう云ふ声の雨に交る中に、破れ筵を敷いた姫君は、だんだん死に顔に変つて行つた。……

六

それから何日か後の月夜、姫君に念仏を勧めた法師は、やはり朱雀門の前の曲殿に、破れ衣の膝を抱へて

ゐた。すると其処へ侍（さむらひ）が一人、悠々と何か歌ひながら、月明りの大路（おほぢ）を歩いて来た。侍は法師の姿を見ると、草履（ざうり）の足を止（と）めたなり、さりげないやうに声をかけた。

「この頃この朱雀門のほとりに、女の泣き声がするさうではないか？」

法師は石畳みに蹲（うづく）まつた儘、たつた一言返事をした。

「お聞きなされ。」

侍はちよつと耳を澄ませた。が、かすかな虫の音の外は、何一つ聞えるものもなかつた。あたりには唯松の匂が、夜気に漂つてゐるだけだつた。侍は口を動か

さうとした。しかしまだ何も云はない内に、突然何処からか女の声が、細そぼそと歎きを送つて来た。侍は太刀に手をかけた。が、声は曲殿の空に、一しきり長い尾を引いた後、だんだん又何処かへ消えて行つた。

「御仏を念じておやりなされ。――」

法師は月光に顔を擡げた。

「あれは極楽も地獄も知らぬ、腑甲斐ない女の魂でござる。御仏を念じておやりなされ。」

しかし侍は返事もせずに、法師の顔を覗きこんだ。と思ふと驚いたやうに、その前へいきなり両手をつい

た。

「内記（ないき）の上人（しやうにん）ではございませんか？　どうして又このやうな所に――」

在俗の名は慶滋（よししげ）の保胤（やすたね）、世に内記の上人と云ふのは、空也（くうや）上人の弟子の中にも、やん事ない高徳の沙門（しやもん）だつた。

（大正十一年七月）

底本：「現代日本文学大系　43　芥川龍之介集」筑摩書房
1968（昭和43）年8月25日初版第1刷発行
入力：j.utiyama
校正：林めぐみ
1998年12月2日公開
2004年3月16日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。